

## 平成29年度男女共同参画推進月間講演会

### 男が働かない、いいじゃないか！～男性の仕事中心の生き方を見直す～



日時：平成29年6月11日（日）13:30～15:30

会場：こうち男女共同参画センター「ソーレ」大会議室

講師 田中俊之さん（大正大学心理社会学部准教授）

1975年、東京都生まれ。博士(社会学)。社会学・男性学・キャリア教育論を主な研究分野とする。日本では「“男”であることと“働く”ということとの結びつきがあまりにも強すぎる」と警鐘を鳴らしている男性学の第一人者。

#### 【主な著書】

『男性学の新展開』青弓社、『男がつらいよ—絶望の時代の希望の男性学』KADOKAWA、『〈40男〉はなぜ嫌われるか』イースト新書、『男が働かない、いいじゃないか！』講談社プラスα新書、小島慶子×田中俊之『不自由な男たち—その生きづらさは、どこから来るのか』祥伝社 など



#### ★働く・働かないは自分で決める

男女平等とか男女共同参画は、女性のためとか、女性の問題と思っている男性もまだ少なくありません。しかし、今や男性を当事者として考えなければいけない時代が来ています。内閣府が毎年作成している男女共同参画白書も、2014年に初めて男性の特集を組みました。国も男性にアプローチしないと男女共同参画は進まないという意識がやっと出てきたわけです。

男性は従来の主力産業を中心に就業者数は減り、給料も下がり続けている一方で、労働力率は世界最高水準です。今日のテーマにもかかわることですが、日本の社会は働いていない男性に対して、「なぜ働いていないのか」という意識がとても強い。だから男性は40年間、働き続けます。

男性学は、男性が男性であるからこそ抱えてしまう悩みや葛藤を対象にした学問です。自殺を例に挙げると、日本では1990年代後半から2010年代にかけて毎年3万人の自殺者が出ました。男女別でみると女性は1万人を超えた年は一度もありません。つまり同じ日本に生きているのに、性別が違うだけで2倍以上も自殺する人数が違った。これは性別が自殺という行為に影響を与えている以外に考えられません。

女性は働くということだけでも、結婚して続けられるのか、妊娠・出産後も続けられるのかと考えざるを得ない。つまり自分の女性という性別に向き合う機会がそれだけ多いわけです。一方男性はそういう機会が少ないので気付かないかもしれませんが、自殺といったデータからも分かるように男性というだけで、ある一定の生き方や行動パターンが当然とされ、この社会の中でプレッシャーを受けていることが分かります。

自分の性別が自分の生き方に影響を与えているかもしれないという視点は、女性だけではなくて男性にも、とても重要な視点です。1980年代後半から社会問題となった働き過ぎや過労死が、30年経った今でも改まらないのはなぜでしょうか。つまり男性の働き過ぎを、本当は誰も問題だと思っていないということです。中年男性が最も心配されることは何かというと、働かないこと、簡単に言えば無職であることです。

我々の社会は、まだ「男は仕事、女は家庭」という常識の中にあり、そこをどう変えるかをきちんと直視しないとイケません。定年後に居場所がない男性が生まれてしまうのは、この弊害です。そもそも人生の中で、ある時期はバリバリ働いて、ある時期は子育てを頑張っていて、またある時期には仕事という多様性があってもいいわけで、性別によって男ならこれ、女ならこれと生き方がワンパターンずつしかないことが問題です。

### ★これからのコミュニケーション

言語学者デボラ・タネンは、「男性は用件伝達型のコミュニケーションをしがちであり、女性は関係形成型のコミュニケーションをする傾向がある」と言っています。用件伝達型は、例えば子どもの成績が下がったときの「塾へ入れれば」「それは君に任せている」といった、問いと答えのようなコミュニケーションです。関係形成型は、相手との共感を目的としたものなので、「大変だね。一緒に考えよう」となります。

人間は後からプログラムされるものが多い生き物ですから、これは脳の違いといった生物学的な違いではなくて、この社会の中で男性はこうしてほしい、女性はこうあってほしいという教育の結果と考えざるを得ません。つまり、男性は競い合うように育てられることで用件伝達型しかできなくなる傾向にあり、女性は仲良く協調するように育てられるため関係形成型になる傾向があるんじゃないでしょうか。

このことはとても重要です。男の子は男の子だというだけで「競争しなさい、もっと上に行きなさい」と育てられますが、競争することがモチベーションとなり、そのことで社会が良くなったのは右肩上がりの高度成長期の時代です。今の右肩下がり、良くて現状維持の日本の社会で、競争して得られるものは何かと立ち止まって考えなければいけないんです。

今、大学でも企業でも女性が元気だと言います。これは男性が弱くなって、女性が元気になったからじゃなくて、社会が転換していることの表れで、女性的とされてきた協調するとか、共感するという能力が、これからの低成長の社会では大事だということです。

男性がしなければならないのは、共感のトレーニングです。人の話をちゃんと聞く「傾聴」がとても大切になります。人の話にちゃんと耳を傾けることで信頼を得る。会話はキャッチボールだから、相手が取れる球を投げなきゃいけないし、相手の投げた球をちゃんと受けとめなきゃいけない。そのためには価値観の転換が必要です。

何げないやりとりがいい関係を作るのに、男性は何も生み出さない無駄話には意味がないと切り捨てて、共感的なコミュニケーションに壁を作っています。おしゃべりをするのが楽しいからおしゃべりするというのを男性はもっと学ぶべきです。

### ★多様性を受け入れる

多様性を認める社会になっていくとき、家族の問題で考えたいのは養子のことです。血がつながってないと自分の子どもだと思えないという人が多いと思いますが、親がいなくて困っている子どもがいるなら、それは社会の課題として考えたほうがいい。血がつながっている子ども以外愛せないみたいな考えは偏見じゃないかと思います。

結婚について、1993年は「するのが当然」という人が51%、最近では「しなくてもよい」が63%になりました。子どもは、1993年には54%の人が「持つのが当然」、今は55%の人が「持たなくてもよい」と回答しています。

だとすると日本の社会はすでにダイバーシティが進んでいるような気がしますが、若者に聞くと「自分は結婚したい、子どもも持ちたい」と言うわけです。つまり結婚しなかったり子どもを持たない他人を「私は認めます」、セクシャルマイノリティの人も「私には関係ないけど、そういう人がいてもいいんじゃない」と。でも、それは消極的な寛容。つまり無関心から「結婚しない人がいてもいいんじゃないですか」と言っているだけで、身近にいたときに本当にその人たちと一緒に暮らしていこうと思っているかどうかとは別だということです。

つまり日本は多様性を認めるには程遠いわけで、では何が必要かというところと積極的寛容。さまざまな意見があるということは当たり前で、その上でどうするのか。そのときに大事なことは、相手に敬意を払える、自分は理解できなくても相手の考えを認めることができるということです。もう一つは開放性です。自分の考えが相手に影響を与えるだろうし、相手の考えにも自分は影響される。ちゃんと心を開いて、コミュニケーションできるかが問われています。私たちはこれから自分とは異なる価値観を持つ個人や集団と一緒に、地域で暮らしていかなければいけません、そのときに実際に混ざり合おうという気持ちが自分にあるかどうかということです。

皆さんがこの地域を発展させていこうというときに、異なる価値観の人同士が会う場をつくり、それをどうつなげて、多様なものが受け入れられる社会をどうつくっていくのか。それが男女共同参画社会の目標ですから、この話が少しはお役に立てたなら良かったと思います。